

令和7年度 音楽科実践・研究計画

部 員 ○大山光子、奥田瑞季

1 昨年度の成果と課題

昨年度の実践を通して、音楽科における自律した学習者の姿が見えてきた。

- ① 5年「民ようお国めぐり～秋田の民よう～」の実践では、試行錯誤しながら、よりよい表現を目指す子どもを支えるための学びとしてゲストティーチャーの活用を取り入れた。「日本の音楽」民謡に取り組むにあたり、プロの民謡歌手として活動している方々をゲストティーチャーとして迎えた。CDや動画などでは味わうことのできない本物の迫力のある演奏を体感・体験したり、これまでの学びで蓄積してきた音楽的な力を引き出しながら学んだりすることができた。モデルを真似ることを動機付けとし、自分たちなりに「民謡らしい歌い方」を解釈して、課題を見いだしたり考えたりしながら活動したことが一人一人の達成感や成就感につながった。題材計画の中にプロの方の生演奏を2回入れたことは、子どもたちの技能と意欲を高める面で効果的であった。自分たちの学びだけではどうしても解決できない課題を、ゲストティーチャーに質問したり、一緒に歌っていただいたりしたことで答えを見付ける姿が見られた。「民謡とは、きれいな声というよりも迫力のある声だと分かった。声を出してはみたけれど、やっぱり迫力のある声には届かなかった。自分も民謡を受け継いでいる人みたいに迫力のある声を出したい。」「民謡は、合唱と違う歌い方で思ったより難しく感じた。でも、伸びやかな歌声は聴いていて気持ちよかった。自分もそんな歌声を届けたい。」「本物の方にまた来てもらって分かったが、まだまだ声量もないし節回しも下手なので、レベルアップできることが分かった」という子どもの振り返りにも成果が表れていた。

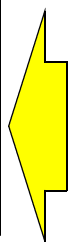
このように、ゲストティーチャーによる生演奏が学ぶ意欲の向上に大きくつながることが明らかになった。ゲストティーチャーの活用は、よりよい表現を目指す子どもたちにとって明確な道しるべとなり有効である。また、活用するタイミングが大切であると考えます。

- ① 3年次の実践では、よりよい音楽表現を目指し、表現力の向上につながるように、音楽活動の中で自分にとってのモデルを見付け、表現に取り入れることを重点としてきた。5年生の実践では、2つのレベルのモデル（プロ・仲間）の設定が「学びのものさし」を働かせる手立てとなった。プロの方と一緒に歌っていただいて節回しや拍のコツをつかみ、技能が高まったところで各グループの発表。そして、よい点や成長した点を見取って伝え合う中で、「お互いのよい点を取り入れたい」「身近なモデルにも近付きたい」という思いにつながっていった。また、「演奏者」「聴き手」になり演奏したり聴き合ったりする活動では、自己と他者の演奏を比較しながら、根拠をもって感想を発言できるように、「聴き手」の聴く視点を「声の出し方」「節回し」と明確にしたことで、表現のよさを認め合う姿も見られた。この活動を通して、仲間のよさや真似してみたい点（自分にとってのモデル）を見付けることができたのである。さらに、学んだことを生かし「民謡」を学習発表会でたくさんの方々に披露できたことが、学んだことの意味や価値を自覚するとともに、達成感や成就感を味わうことにつながった。

これらの手立てが連動し、子どもたち一人一人が民謡らしさを意識し、みんなで作り上げるよりよい表現を追究できていたのではないかと考える。

2 音楽科における自律した学習者の姿

- ① 「音楽のもと」に目を向けながら、自らの音楽表現をよりよいものにしようとする姿
② 感受と知覚の両方を働かせ、思いをもって音楽と関わり、仲間と表現することで、人とのつながりを大切にする姿



3 授業デザインの具体的な取組

- よりよい表現を目指し、表現力の向上につながるように、モデリングによる学びを取り入れる。
・本物との出会い ・身近なモデル
○根拠をもって互いの音楽表現のよさを認め合うことができるように、「演奏者」「聴き手」になり助言し合える場を設定する。